



Subaru

男声合唱団

ニュース746

'20.10.31

「昂」「10月第5金のレッスン」開催！ 13コンサート第3部曲を中心に！

10月30日



□10月30日（金）18：00～20：30 13回コンサートの第3部の曲を中心にレッスンを行いました。奥村さんの体操・千秋さんのヴォイストレーニングのあと、本並先生の指揮で、まず「このみち」を練習しました。

「このみち」は11回コンサート（2017年）で初演し、12回コンサート（2019年）ではアンコール曲として歌ってきた金子みすゞの詩に石若雅弥が作曲した名曲、「このみちの先には、おおきなもりがあろうよ、おおきなうみがあろうよ、おおきなみやこがあろうよ、みんなで、みんなでゆこうよ、このみちをゆこうよ」と・・・

楽譜に忠実に、曲想を音に、一からの合唱曲として作り上げましょう！

「昂はうたう」は、18日（日）のレッスン（A班・B班別）に引き続いてのレッスンとなりました。18日のレッスンをふまえ、細部に亘る注意点の指摘・・・音程、同音のタイとスラーの表現、スラー、クレッシェンド、フォルテ、テヌート等を大事にして、表現豊かに！誇らしげに！あたたかく、雄々しく歌おおー

□15分間、休憩・連絡事項の報告・窓を開けて通風し、5分ほどの時間、千秋作詞・森作曲の新曲「忘れ去られた、あの日から」（この間の一連の「方正」関連の歌の一つ）を千秋さんの紹介で、団員と共に復唱しました。

報告事項では、山本副団長から、「コロナウイルスが、気温の低下（冬へと）とともに、世界的には、ヨーロッパ・アメリカで再度の大流行の兆しが見えていること、日本でも一向に衰えず、徐々に感染増の傾向にあることから、コロナウイルスにかからないよう、十分注意し、健康に注意して暮らしましょう！」と毎日の感染者数のグラフを示し説明がありました。

□休憩後、再度、本並先生の指揮で、「方正の青い空」と「地雷ではなく花をください」をレッスンしました。この2曲も、18日（日）に



も練習し、復習を兼ねたレッスンとなりました。

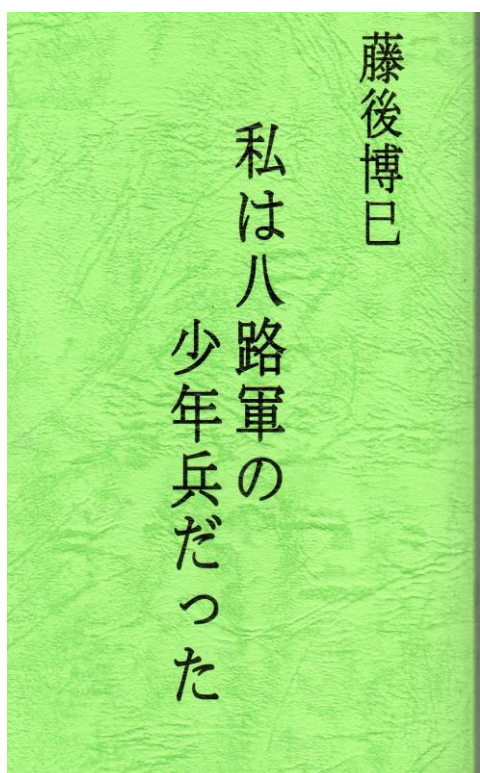
再度 10 分ほど休憩し、伊藤副指揮者の指揮で、「ゆらゆら春」と「死んだ男の残したものは」をレッスンしました。

「ゆらゆら春」では、1 番／2 番前半を独唱する奥村さんの低音のあたたかな声がねむかホールに鳴り響き、2 番のオブリガードの千秋さんのテナーの声が色を添え、感動的な曲になる期待が膨らみました。2 番後半と 3 番の全員合唱がどれだけしっかりと歌えるか・・・

□ピアノ伴奏は森二三さん。参加者は全 19 名でした。(団員は 17 名。T1: 6 名、T2: 4 名、BR: 4 名、BS: 3 名の参加でした。)

(連絡事項)

昴通信 14



「……私は十二年前にやっと大阪に帰りました。私が少年のころに育った大阪から、私を含めた多くの少年がかつての満洲—中国東北に渡りました。そしてそこから少くない人たちが帰らぬ人となったと聞きました。この人たちの死を無駄にしないためにも、この私の命を平和のために役立たせたいと言えます。」
昭和三十年二月、舞鶴から大阪の阪神電車「野田駅」に着いた私は、出迎えの人たちに、このような挨拶をしたことを覚えています。
その瞬間、私の脳裏に、まる十二年前の光景がよみがえってきました。それは、八阪国民学校(現八阪中学校)の校長先生はじめ諸先生方や全生徒が、日の丸の旗を振り、万歳、万歳の声で送り出してくれたその顔と姿が……。
私は「生きている」喜びを噛みしめるのです。



渡満時の筆者

定例レッスン 参加者割り振り表 11月					(敬称略)
パート	11月6日	11月15日前半	11月15日後半	11月20日	11月29日(日)
T1	吉岡	千秋	吉田	千秋	
	吉田	鈴木	若園	鈴木	全
	若園	立川	山本	立川	員
	山本	小西	(千秋)	小西	練
	(千秋)	吉岡			習
T2	米川	高田	米川	寺脇	大
	中谷	大島	中谷	大島	東
	寺脇	更家	高田	更家	生
	伊藤	伊藤	伊藤	伊藤	涯
					学
BR	奥村	奥村	奥村	奥村	習
	向井	大橋	向井	大橋	G
	山口	春木谷	春木谷	春木谷	A
	吉川	山口	岩崎	吉川	K
		西村			R
BS	はが	川妻	川妻	はが	多
	光本	光本	光本	川妻	目
	岡邑	岡邑	岡邑	岡邑	的
	東尾	東尾		東尾	室

はじめに

日本と中国との関係は歴史的に古く、絶ち難い強い絆で結ばれています。その背景には過去も今も、さまざまな人間のドラマがあります。

その卑近な例を挙げるとしますと、一つに中国残留—日本人孤児たちがあります。歴史に翻弄されて、苛酷な人生の苦渋を余儀なくされたこの人たちは、日本の中国侵略政策のもたらした「負の歴史」の生き証人でもあります。その日本の子どもたちが、中国人の手によって育てられ、成長し、その多くが中国の地に根を下ろしているその意義は深く、かつ重いものがあります。そして、その動機はともかく、中国の養父母たちの人道精神は、私たちに深い感銘を与えました。その孤児たち一人ひとりの心情はどうであろうとも、彼らこそ日中両国のかすがい的存在であることは何人も否定できません。

このような両国の特殊な結びつきを象徴する事例のいま一つに、戦後、日本人でありながら八路軍（現中国人民解放軍）の兵士として戦後内戦に参加し、前線で、あるいは後方で、中国人たちとともに新しい国づくりに協力しました。世間ではほとんど知られていない戦後の日本人の足跡があります。実は私もその一人だったのです。

私は中国の新しい国づくりのために青春と生命を賭して貢献した若者たちがいたということ、厳粛な歴史の事実として語り継ぐべきではないかと痛感し、ぜひとも書き残したいという思いに駆られました。

日本の敗戦は今年で七五年を迎え、改めて「歴史認識」が問われる年でもあります。いま、

世界の宝でもある日本国憲法改悪の動きが活発になっていく中で、かつての侵略戦争を平然と肯定する日本国民会議などの動向は重視しなければなりません。とりわけ私のように満州（現中国東北地方）で敗戦の事態に直面し、多くの同胞が日本政府に見捨てられた動乱の中、塗炭の苦しみをなめされた者にとっては、絶対容認できるものではありません。

こうした世相の中、私はこの記録で私なりに日中不再戦・平和の思いを認めることの大切さの思いの浮上とともに、多くの友人から私の希有な中国での体験をぜひ本にすべきだと強く促されました。しかし、果たして七十余年前のことをどれだけ記憶しているかという自信のなさもありましたが、ようやく本書のような形で出版させることができました。

いま、私のこれまでの人生をふりかえってみますと、長くも、短いようにも思えます。そのなかで、中国で青春を過ごした私は、中国は第二の故郷であり、郷愁の地でもあります。私にとって、中国は決して忘れることのできない存在です。

私が中国の人たちと苦楽をともにし、同じ釜の飯を食いながら、とりわけ解放軍で生活した七年間というものは、自分の人生にとって得たい体験であり、私の生き方を大きく変遷なした時代のも、紛れもない真実の一端でもあると思うのです。

執筆当初は、この書を従軍記のようなものかと思いましたが、それでは私が満州に行っていたわれや、私にとって人生の大きく変えさせた敗戦直後の様相を解って頂きたいという思惑もあって、私が歩んできた人生の一部の記録としての自分史的なものにしました。

しかし、頼らざるを得ないのは自分がおぼろげに覚えていた記憶と、その補いは私と同じような体験を綴った元八路軍日本人兵士の著書や、中国文献に依拠するしかありませんでした。如何せん、内容がずいぶん昔のことであり、それゆえに、記憶違いは避けられず、このよう

「昂」の創設者・藤後博已名誉団長が91歳の今、『私は八路軍の少年兵だった』という衝撃的な「自分史」自叙伝を著されました。「戦争と平和」の現実が厳しく問われている今、ここに記されている藤後さんの「経験史」はいまも私たちが生きるうえでの参考になることでしょう。「日本の侵略した戦争の事実」をごまかさず・忘れず、「2度と戦争をしては駄目!」「平和を守れ・日本国憲法を改悪するな!」と私たちに語りかけています。厳しい現実の出来事が語られています。語り口は優しい心にあふれています。

(カンパとして1,000円をお願いします。)(編集子)